Associazione di Studi Italiani in Giappone

15世紀のフィレンツェ社会における「友人関係」

徳　橋　　曜

はじめに

中世・近世のフィレンツェ社会における人間関係の重要性は、多くの研究者によって指摘されている。都市には、親族関係、アルテや会社等の職業上の結び付き、地縁的結合、友人関係、信仰団体、遊び仲間などが、錯綜しながら展開し、複合的なネットワークを形成していた。そこには、フィレンツェの人々が生まれながらに、あるいは無自覚に関与するしがらみもあれば、政治的・社会的な利害や信仰心から意識的に参入・結成する人的結合関係もあった。

こうした複合的な人間関係・コネクションは、勿論フィレンツェのみならず、イタリアの都市の多くで見られたものであるが、殊にフィレンツェにおいては、都市政治の動向にまで関わる意義を有していた。この都市は、12世紀にコムーネとして自立して以来、共和政体を維持し、その伝統に固執し続けたが、政治体制が真に安定したことはなかった。また富裕な商人を中心とする都市の支配層も、貴族共和政が制度化されたヴェネツィアとは異なり、その身分が定義・固定されてはいなかった。その結果、政治的には不安定であったが、同時に階層間の透過性・柔軟性を持ってもいた。かかる社会における社会的地位の向上ないし維持や政治への参加は、単に財産によってのみ達成されるものでもなければ、逆に、固定した身分の区別によって限定或いは保証されるものでもなかった。ここに種々の人脈が介在することになったのである。

このようなフィレンツェ社会の基本的な性格は、1530年まで保たれていたが、当然ながらその内実は、時代と共に変化した。殊に大きな変化は、15世紀に生じたと考えられる。この世紀は、メディチ家が共和国支配の実権を握るべく制

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

度改革を行い、フィレンツェの権力構造が、従来とは大きく変わっていった時代であった。都市社会に広がる人的ネットワークは、政治に影響を及ぼしたが、同時に都市の権力構造の変化に影響されもしたはずである。筆者はこれまで、主として14世紀に目を向け、メディチ体制が確立する以前のフィレンツェ社会における人的結合関係を様々な側面から考察してみようとしてきた。その目的は未だ達成されたとは言い難いが、フィレンツェ史の流れ、更にヨーロッパ史の大きな流れの中にこの問題を位置づけることを考えると、15世紀の社会に目を向けない訳にはいかない。

近年F.W.ケントが、G.コルティと共に出版した史料 *Bartolommeo Cederni and His Friends. Letters to an Obscure Florentine* は、この15世紀の人的ネットワークを考察する上で、示唆に富んでいる(1)。15世紀フィレンツェの中層市民バルトロンメオ・チェデルニに宛てられた多くの書簡に基づいて、彼の周囲の人間関係をケントが考察し、更に、チェデルニと周囲の人間達との関係を特に窺わせるものを46通選んで、刊行したものである。史料集としては些か心もとない史料の数であるが、《Obscure Florentine》と副題にもあるように、なかなか明らかにしにくい中層市民の人間関係を考える手掛かりとなる。そこで本稿では、このバルトロンメオ・チェデルニの「友人関係（amicizia)」から、15世紀フィレンツェの人的ネットワークを考察し、それをフィレンツェ史の流れの中に位置付けることを試みる。

1. 都市社会のネットワーク

14・15世紀のフィレンツェの社会・政治体制の基本形は、1282年（実際の施行は83年以降）のプリオーリ（執政委員）制の設置によって成立する。富裕な商人を中心とする有力者層は、アルテ（ギルド)、グェルファ会 Parte Guelfa（グェルフィの有力市民が、ギベッリーニ監視の為に結成した私的団体)、行政区組織（各行政区は、生活基盤である小教区をいくつか含む）を基盤として都市の実権を握るようになった。彼らは各組織の内部で大きな発言力を持ってい

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

たのである[2]。

だが、14世紀半ばの不況、黒死病による人口激減などの危機的状況の中で、都市支配層の力は弱まった。相対的に力を強めたのが、手工業者を中心とする小アルテの成員である。彼らは従来、富裕な商人層にアルテを通じて制御され、独自の発言力の伸長を抑えられていた。だがこの時期には、寧ろアルテに結集することで、彼らは自分達の政治的権利を伸長しようとした。一時的にせよ、アテネ公ゴーティエ・ド・ブリエンヌの支配の下（1342－43年）で、小アルテの発言力が強められた経験も、彼らの抬頭を勢いづけたであろう。当時のこうした動向を、J. M. ネジェイミーは「ギルド・リパブリカニズム」と呼んでいる[3]。また彼らと共に、ジェンテ・ヌォーヴァ gente nuova（新参者）と称された新興商人層も、旧来の支配層の弱体化に乗じて勢力を拡大していった。かかる機運の中で、教皇庁を相手にした八聖人戦争の失敗を契機として、1378年にチォンピ一揆が起きたのである。一揆は、アルテを核とする社会体制を継承・発展させようとしたものであり、「ギルド・リパブリカニズム」の頂点であった[4]。だが一揆は失敗し、下層労働者も、それまで小アルテを基盤に独自の勢力を成していた手工業者層も、その社会的発言力を封じられた。政治的基盤としてのアルテの重要性そのものも後退した。

1382年に始まる所謂「寡頭政治の時代」には、チォンピ一揆直後の混乱を勝ち抜いた家門が、都市の支配権を手にした。「寡頭政治」の程度、特定家門への権力の集中度については議論があるが、都市を実際に動かす階層が限定され、そのうちでも少数の有力家門が実権を掌握して、市政をコントロールするようになったことは認められよう。都市の政治は、これらの家門の協調と合意によって動かされたのである[5]。そして、かかる体制の中で頭角を顕し、次第に派閥を形成して対立するようになったのが、旧勢力を代表するアルビッツィ家と、ジェンテ・ヌォーヴァに支持されたメディチ家であった。公職への選出や強制公債の割当などをめぐる新旧勢力の対立から、両家を核とした２つの党派が形成された。1420年代から尖鋭化してくる党派対立は、一時はアルビッツィ派が優勢になったものの、結局はメディチ派の勝利に終わる[6]。

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

このように不安定な都市社会で、保身・栄達を図り、利益を得る為には、ただ漫然と人間関係の中に取り込まれているに留まらず、積極的に様々な人脈を利用しなければならなかった。政治的・経済的利益を共にする連携の必要な上層市民にとっても、公職への推挙から借金に至るまで有力者の後援を要する中層・下層の都市住民にとっても、「親族、友人、隣人（parenti, amici, vicini)」を通じた人脈は社会生活に不可欠であった(7)。

親族（血族・姻族）の連携は、特に都市の上層市民にとって重要なものである。共通の先祖から発しているという連帯感を持った一族の結束は、都市生活の様々な局面での後ろ盾となった(8)。有力家門同士は婚姻を通じて結び付き、相互の政治力や社会的影響力を利用して、自家の勢力の拡大に努めた。また、社会的に自身よりも上の階層と縁組を成立させることができれば、それは自家の社会的上昇に繋がった。14世紀末の商人ジョヴァンニ・ディ・パゴロ・モレッリは、処世訓に満ちた有名な彼の『リコルディ（覚書)』*Ricordi* の中で、結婚についてこう忠告している。「お前よりも下の家柄から妻を娶るな、寧ろお前よりも上の家から妻を得るように努めよ。但し、［相手の家柄が高すぎて］彼女が夫になり、お前が妻になるようなことにならないように……」(9)。しかしながら、上層は同じ階層の内部で縁組を結ぶ傾向があり、婚姻による階層間の結合は限られた(10)。

異なる階層間の結び付きを含めた、日常的な人間関係という点では、寧ろ小教区や行政区などの狭い生活空間（但しその範囲は、必ずしも単独の教区や行政区の中に限定されるものではない）における隣人関係（vicinanza）の存在が重要である。無論、日常の生活において、同程度の階層に属する者、或いは職種を同じくする者同士の連帯感は強いものがあったと思われる。フィレンツェでは、概して職業による住み分けが明確ではないものの、染色工のように居住地域が集中している例もある(11)。しかし、一般的に隣人関係は、建物の所有者と賃借人の関係（富裕な市民は複数の建物を所有し、自身もそこに住みつつ、店舗や部屋を賃貸することが多かった）を含めて、種々の階層・職業を結び付けるものであった(12)。行政区が地区行政の単位であったばかりでなく、その

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

内部での自治が認められていたことも重要である。1282年のプリオーリ制は、街区（セスト sesto）を選出の単位としていた。1343年以降は、市内は16の行政区（ゴンファローネ gonfalone［以下「行政区」とはゴンファローネを指す］）に分けられ、これが公職への選出や臨時税・強制公債の割当の際の基本単位となる（この上部の行政単位としては4つのクワルティエーレ quartiere＝街区があり、各々がゴンファローネ4つで構成されていた）。

有力市民は、こうした場で主導権を発揮した。有力な家門の多くは、ポポラーニたるとマニャーティたるとを問わず、特定の地区に集中して居住しており、その地区がそれぞれの家門の地盤になっていたのである。ケント夫妻は、15世紀のメディチ体制下におけるリオン・ロッソ（赤獅子）行政区の自治を詳細に検討し、自治集会への出席率などに基づいて、幾つかの有力家門が行政区自治を牛耳る傾向にあったことを明らかにしている。夫妻の関心は寧ろ、メディチ体制下の都市政府が、こうした行政区自治を管理・コントロールしようとしたことにある。だが、そうであれば尚更、メディチ体制以前の地区行政は、各地区の有力者に掌握されていたと考えられる(13)。中・下層の市民も地区行政への参加は可能であったが、彼らの政治力は弱く、上層市民を抑えるほどの発言力は無かった。それでも14世紀中葉の「ギルド・リパブリカニズム」の時代には、手工業者・商店主はアルテに結集できたから、その政治力を背景にして、地域での発言力を或る程度は持ち得たであろう。だが、チォンピ一揆の失敗によってアルテが政治的に無力化すると、彼らと上層市民との政治力の差は歴然たるものになり、彼らは都市の実権を握る有力市民に依存せざるを得なくなった。

公職選出の為に行政区で候補者名簿を作成したり、行政区毎に割り当てられた強制公債を、負担能力に応じて各戸に割り当てる為の協議の場では、有力市民の発言が効力を発した。都市の役職への就任を望む者、公債を不当に負担させられることを恐れる者は、自身の居住地区の有力者と繋がりを作り、その庇護を受ける必要があった。モレッリは彼の父パゴロについて、「良き人々、財産と権力のある人々の友情を得ようと常に努めていた」と述べている(14)。ま

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

た市内には、出稼ぎの賃金労働者をはじめとして、市民権を持たない者も多数居住していた。彼らに対しても、上層市民は有形無形の恩恵を与えた。こうして地域の住民を自家の支持勢力とすることで、有力市民は行政区内での影響力を確保し（1つの行政区に複数の有力家門が存在していた――姻戚関係などを通じて連帯し得たとはいえ――ことには、留意すべきであろう）、更に勢力基盤としての地区共同体を強化することができた。洗礼という宗教的な儀式すら、下層の隣人からの支持の強化に利用された可能性がある。上層市民である新生児の親は、自分達よりも下の階層に属する隣人を洗礼立会人（名付け親）に指名し、これと霊的な疑似親族関係を結ぶことで、自家の勢力に取り込んだ。このように地域社会の人間関係は、有力者を中心にしたパトロネィジの性格を持っていたのである[15]。

更に友人関係（amicizia）が、上述の親族関係や隣人関係と重なり合いつつ、人々を結び付けた。「友人」の語は、本来的な友情で結ばれた人間関係を指す場合もあれば、より広い互助的関係、場合によっては「知り合い」程度の関係にも用いられた。兄弟団の成員同士も「兄弟」であると同時に「友人」であり得た。アルテや職場での連帯も「友人」としてのそれである。職人や賃金労働者の酒場での付き合いなども、ここに含めることができよう。上下の階層が結び付く場合には、両者の間に庇護と奉仕の関係が生じ、友人関係が実際にはパトロネィジとなることもあった。R.F.E.ワイスマンは兄弟団を、階層や隣人関係の枠を越えて人々が接触できる場と見つつ、それ故に兄弟団はまた、個人的なネットワークを拡大し、全市的な広がりを持つパトロネィジに結び付く機会を団員に提供した、と指摘している[16]。いずれにしても、「友人」という曖昧な言葉は、階層・職業・居住地域の相違を越えて人々を結び付けるには、実に好都合であった。有力者の庇護を求める者にとってのみならず、パトロネィジと支持基盤の拡大を図る有力市民にとっても、都市社会に無制限に広がり得る友人関係は、利用価値が高かった。この柔軟性を以て友人関係は、次節以下で見るように、メディチ体制下の重要な人的結合関係となったのである。

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

2. バルトロンメオ・チェデルニの「友人関係」

1334年10月、コジモ・デ・メディチがフィレンツェに戻ってきた。彼は既存の共和政体の政治機構を壊さずに、権力を掌握することに努めた。まず親メディチ派をアッコッピアトーリ accoppiatori（選挙管理委員）に任じ、その権限を拡大することによって、公職抽選をコントロールする一方で、やはり親メディチ派で構成したバリーア balia（特別委員会）を頻繁に設置した。バリーアは本来、非常事態に際して設置される臨時特別委員会で、常置の行政・立法機関を超越した権限を与えられるものである。コジモとメディチ派はこれによって、通常の政治組織を破壊せずに、無力化することができた(17)。こうして作り上げられたメディチ体制は、子のピエロを経て、孫のロレンツォへと引き継がれていく。バルトロンメオ・チェデルニの生きた時代は、メディチ家がメディチ派に支えられながら、都市の実権を手中に収めていく時代であった。それは、中世のコムーネの体制が、16世紀のメディチ家の君主制へと転換していく変動の時代でもある。

バルトロンメオ・ディ・チェデルノ・チェデルニ Bartolommeo di Cederno Cederni は、1416年に生まれ1482年に死んだ。富裕とは言えないものの、多少の資産を有する中層市民であった。チェデルニ家はジェンテ・ヌォーヴァに属し、ケントによれば、我々のバルトロンメオの祖父バルトロンメオ、通称リッチョに迄遡れる(18)。彼の父チェデルノは毛織物業者で、サン・ロモロ教会に小さな礼拝堂を寄進しているところから、一族の元来の居住地域はサンタ・クローチェ街区のカッロ（牛車）行政区であったろうと思われるが、このチェデルノの時代に、同じサンタ・クローチェ街区のブエ（牛）行政区に移住した。チェデルニ家の同族は少なく、バルトロンメオ・ディ・チェデルノの父系親族としては、サンタ・マリア・ノヴェッラ街区のリオン・ビアンコ（白獅子）行政区に、伯父ジョヴァンニとその息子バルトロンメオの一家がいるのみである。ジョヴァンニは、1427年のカタストで、リオン・ビアンコ行政区の住人として4401フィオリーニを申告している(19)。

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

チェデルノがブエ区の新参者である為に、チェデルニ家の行政区内での発言力は弱かった[20]。バルトロンメオ自身も、ブエ区の中で特に勢力拡大に努めてはいなかったようである。子孫の繁栄による自家勢力の拡大にも熱心ではなく、或る寡婦と結婚したものの直ぐに別居し、その後は再婚もせぬまま、子供も残さなかった。既に述べたように、当時のフィレンツェ人（少なくとも中層以上）にとって、血族・姻族の繋がりは重要であったが、彼がこれを積極的に拡大しようとした形跡は無い。ジョヴァンニ・モレッリの描くような、野心に満ちたフィレンツェ商人の姿をそこに見ることはできない[21]。

だが、このバルトロンメオの周囲に展開していた人間関係は、広範で興味深いものである。フィレンツェの文書館には、彼の「友人」達が彼に宛てて送った数百もの書簡が残っている。ケントとコルティが刊行したのはその一部に過ぎないが、「友人関係」の在り方を見ることができる。

彼の友人関係の中で、特に彼に近しい人間を見ていこう。まず、彼の身近には２人の妹ルクレツィアとフィオレッタの夫である、ドメニコ・ディ・グワスパッレ・シモーニとセル・ピエロ・ディ・マリアノ・チェッキ（「セル ser」の呼称からも分かるように、公証人である）がいる。この２人の義弟は、年齢もバルトロンメオに近く、所属行政区に関してもドメニコがバルトロンメオと同じブエ区に、セル・ピエロが隣接するルオテ（車輪）区に属していた。書簡からは、彼らとバルトロンメオとの緊密な結び付きが窺える[22]。一方、母方の従兄弟トンマーソ・ディ・ジョヴァンニ・カリッフィは、フィレンツェからアルノ川を溯ったクオナで細々と暮らしていた。都市に住んでいて政治・社会情勢に通じ、様々な人脈を持っていたバルトロンメオは、彼の為に助言をしてやるなどの援助をしていたらしい[23]。フィレンツェ社会では、親族関係として重視されるのは、概して父系血族であった[24]。バルトロンメオと母方の従兄弟との間にかかる繋がりが存続したのは、彼らが上層の大きな家門の成員ではなく、また双方とも親族が少なかった為であろうか。

ドメニコやセル・ピエロ以外に、バルトロンメオの周囲には、彼と生活空間を共有している友人達がいる。ブエ区ではピエロ・ディ・ピエロ・ジャンニと

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

マウロ・チェッフィーニ、ルオテ区ではベルナルド・チャッキ、そしてルオテと同様にブエに隣接したリオン・ネロ（黒獅子）区では、サルヴェストロ・ディ・ザノービ・デル・チーカとフランチェスコ・カッチーニが、バルトロンメオと親しかった。チャッキは自分の子供の洗礼立会人に、バルトロンメオを指名している[25]。彼らの職業については残念ながら殆ど判らないが、チェッフィーニとチャッキ、カッチーニは、A.モルホの分析したカタストの申告から、社会的には中層以上と判断できよう[26]。また、デル・チーカ家は葡萄酒商（小アルテに属する）で、やはり中層市民と位置づけられるが、メディチ派として有利な立場にあった。デル・チーカ家の人間は、しばしばバリーアのメンバーに名を連ね、1466年には、サルヴェストロがプリオーレになっている[27]。

これらの友人達と同様にバルトロンメオと近しい関係にありながら、彼らとはやや異なった立場にあるのが、ボーノ・ボーニである。ボーニ家はジェンテ・ヌォーヴァに属し、金融業と絹織物業に携わっていた。市内での社会的基盤はサン・ジョヴァンニ街区のドラゴ（竜）行政区（ブエ区に近接している）にあり、何軒もの建物を所有する富裕な市民であった。1457/58年のカタストでは、17,018フィオリーニという高額の財産を申告している。これはボーニ一族のうちでも突出している。彼の息子ジョヴァンニが（少なくともジョヴァンニの名義で）、1461年にドラゴ区内の「サン・ミケーレ・ベルテルディ教会の広場に面した幾つかの家屋」を購入し、これを取り壊して新たに建てた屋敷（現Palazzo Antinori）からも、一族の中でのボーノの系統の経済力が窺われる。但しメディチ家とは繋がりを持たず、その点で、メディチ体制下のフィレンツェ社会では不利であった[28]。バルトロンメオは、このボーノとジョヴァンニがメルカート・ヌォーヴォで営む銀行に雇われ、1474年に銀行が倒産するまで働いていたのである。この銀行でのバルトロンメオの立場について、ケントは明言していないが、雇用主であるボーニとの親近性から推すと、ファットーレ（幹部社員）であった可能性が高く、共同出資者 compagno になった形跡は無い[29]。書簡の文面でボーニとバルトロンメオとは「友人」として表現され、また実際にも親しい関係にあったが、その一方で、所属階層及び経済力の点で

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

は歴然たる上下差があり、また雇用者と被雇用者の関係にもあった訳である。

さて、バルトロンメオの「友人」の中で、最も目を引く存在が、パンドルフィーニの一族である。パンドルフィーニ家もボーニ家と同様にジェンテ・ヌォーヴァで、ボーニとは対照的に、メディチ家と結び付いた有力家門であった。所属行政区はサン・ジョヴァンニ街区のキァーヴィ（鍵）区で、ブエ区に隣接している。ピエルフィリッポ・パンドルフィーニとロレンツォ・デ・メディチとの間には殊に交流があり、彼がバルトロンメオに送った書簡や、ロレンツォから彼への書簡にそれが垣間見える(30)。このパンドルフィーニ家とバルトロンメオとの絆は、バルトロンメオの父チェデルノの代からのもので、チェデルノは1438年に作った遺言で、当時22歳のバルトロンメオのことを、アーニョロ・パンドルフィーニとその２人の息子カルロとジャンノッツォに託している(31)。どのような契機で両家が結び付いたのかは不明であるが、バルトロンメオはアーニョロ、カルロとジャンノッツォ（特に後者）、ジャンノッツォの息子のパンドルフォとピエルフィリッポ、更にパンドルフォの息子のバルトロンメオ（チェデルニからその名を貰っている(32)）の４代にわたって、パンドルフィーニ家と関わり続け、彼らの為に尽力した。パンドルフィーニの成員の近況を尋ねるような書簡は、確かにパンドルフィーニ家とバルトロンメオとの親しさを示す。だが、両者の社会的地位には大きな格差がある。また実際、バルトロンメオは非常に献身的で、ジャンノッツォの代理人（procuratore）をしばしば務めたり、彼が大使として赴任する際に、補佐役として随行した。ピエルフィリッポが従属都市の監督官や大使として赴任したときには、その留守宅の監督等、ピエルフィリッポの為にフィレンツェで雑務を引き受けた。そしてついには、死に際して、サン・ロモロ教会に在る一族の礼拝堂ではなく、パンドルフィーニが（そして彼自身も）援助していたバディア修道院に埋葬されたのである。このような状況から、両者の関係は対等の友人関係というよりは、パトロンとクライアントの関係と見られる(33)。

このように、バルトロンメオの人間関係において、隣人は小さからぬ役割を果たしていた。前節で述べたように、地縁的な繋がりは、当時の社会生活にお

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

いて大きな比重を占めている。バルトロンメオの友人達の間にも、日常空間を共有する者同士の親近感があったろう。しかし、前節に引用したモレッリの言からも判るように、フィレンツェ人の必要としていた隣人関係とは、日常空間の中で自然に育まれる交友関係に留まるものではなく、より積極的な隣人同士の支援を意味し、その為に彼らは友人や親族を隣人に求めた(34)。この場合、単に自分の生活空間の範囲に友人や姻戚を得るのみでは不十分である。自分の属する行政区内部で、自分を保護・援助してくれる有力者との繋がりを持たなければならない。行政区自治の要である彼らの影響力が重要なのである(35)。ところがバルトロンメオの人脈には、同じ行政区内の有力者は存在しなかった。勿論、パンドルフィーニもボーニも、ブエ区の行政に直接関与することは出来ない。バルトロンメオの人脈網は、かなり広い範囲に及ぶものでありながら、自身の行政区での社会的基盤は脆弱であった。

このようなバルトロンメオの友人関係が、実際にどう機能したかを示してくれる好例がある。1447年11月、バルトロンメオは減税官 sgravatore に自分の減税措置を図ってもらう為に、友人達に協力を要請した。彼自身は病床のジャンノッツォに付き添ってピサにおり、フィレンツェで動くことが不可能だった(36)。カタスト施行後も、臨時税や強制公債は16の行政区毎に割り当てられ、更にそれぞれの行政区内部で各戸に振り分けられたが、この割当額が徴収目標総額を超過してしまった場合に、コムーネによって、各行政区においてその住民の中から減税官が選出され、各戸の負担を減額する（その名の通り「重荷を下ろす sgravare」）のである。この減税官の選出には各行政区の意思が反映された上、減額の基準も曖昧で恣意的なものであった(37)。ここでも、減税官との人的関係がものを言うことになる。

この要請に従って動いたのは、バルトロンメオの義兄弟ドメニコ・シモーニとセル・ピエロ・チェッキ、ピエロ・ジャンニ、サルヴェストロ・デル・チーカ、そしてボーノ・ボーニと従兄弟のロドヴィコである。彼らは、負担軽減の斟酌に影響力を持つ人間に働きかけ、バルトロンメオの減額措置を成就させようとした。セル・ピエロ・チェッキは、バルトロンメオに宛てた書簡の中で、

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

自分やその他の友人達が、ブエ区での減税の関係者、或いはそれに影響力を持つ人間（ニッコロ・マガルディ、ジュリアーノ・チェッフィーニ、ヤコポ・コッキ＝ドナーティ、バルド・コルシ）に協力を働きかけたことを報告した上で、こう述べている。「この件では君が、君に良かれと思っている友人達の仲介で、うまくやれるだろうと思っている。誓って言うが、トンマーソ・ソデリーニやサルヴェストロ・デル・チーカ、ロドヴィコ・ボーニ、チャコ［恐らくベルナルド・チャッキ］、ボーノ［ボーノ・ボーニ］――特に彼はこれが自分の務めだと心得ているから――は、頼り甲斐のあるところを見せて、喜んで君を助けてくれるよ」（1447年11月21日付）(38)。

ここで「君に良かれと思っている友人達（gli amici tuoi che ti vogliono bene）」の中にトンマーソ・ソデリーニが含まれているのは、注目に価する。トンマーソ・ソデリーニはメディチ家と連帯して力を伸ばしていた有力市民で、強力な後ろ盾である(39)。両者がどのように結び付いたのか、また実際にどれ程親しかったかについては明らかではないが、少なくともソデリーニはバルトロンメオに対して、「君の手紙を２通受け取って、君の要望については了解した。それでこの件について、私に出来る限りのことはしたし、今後もしよう。これは喜んでするのだから、私に手紙を寄越すなんて無用だ」と、書簡（1447年11月22日付）で協力を約束している(40)。だが、バルトロンメオはドメニコ・シモーニに対しても、ソデリーニに支援を依頼しに赴いてくれるよう頼んでいる。「君は私に、私が個人的に（per lo fatto mio）トンマーソ・ソデリーニに接触してくれ、と言って寄越したね。未だ何もしていないのだ。機会を作ったら、君の代理で彼に会ってくるよ」（1447年11月23日付）というシモーニの書簡は、寧ろシモーニとソデリーニとの親近性を示しているようでもある(41)。

一方、ボーノ・ボーニは、偶然にもドラゴ区の減税官に選出された。そこで彼は、ブエ区の減税官に交換条件を申し入れ、バルトロンメオの為に便宜を図ってもらおうと考えた。「君の減税官は、ヤコポ・ディ・ニッコロ・ディ・ジョルジョ・ベッティ・ベルリンギエリだ。彼が選出された際に、彼に君の要望を話した。私も自分の行政区で減税官になったから、君の減税官に言っておいた

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

よ。もし私の行政区で減税してもらいたい件があったら、言ってくれるように。そして、どうか君の件は私に任せてもらいたいとね。彼は私にそうすると約束してくれた。」「もう一度、彼［ヤコポ・ベルリンギエリ］の義理の兄弟のマリオット・バルトリーニに、彼にこの件を忘れないように言いに行ってくれと頼んでおいた。うまくやれると思うよ」(1447年11月23日付)[42]。

ボーニはドラゴ区に所属しているので、バルトロンメオの所属するブエ区の行政に、直接関与することは出来ない。その代わりに、減税官の立場を利用してブエ区の減税官に働きかけ、更にこの減税官の義兄弟（ボーニの姻戚で、銀行の顧客でもあったニッコロ・バルトリーニは、多分マリオットの親族であろう）を通じて、説得工作をしたのである。ベルリンギエリが減税官になったことについては、ドメニコ・シモーニも、やはり11月23日付の書簡でバルトロンメオに知らせており、減税官個人との交渉が重要であったことが窺える[43]。ボーニと同様に多くの減税官が、自分の親族や友人の為に便宜を図り合ったに違いない[44]。

更にボーニは、従兄弟のロドヴィコと共に、ブエ区の別の減税官とも交渉している。「……君の減税官はジョヴァンニ・デル・ザケリアだ。今朝、ロドヴィコ・ボーニと私はサンタ・クローチェに彼を訪ねていき、君のことについてじっくりと彼に話した。我々に必要なことを彼に託し、このことを、つまり君の負担額を18ソルディ減らしてくれないかということを、どうかよろしく頼むと付け加えてね。彼は我々に、喜んでそうしたいと返事をしてくれた。明朝か或いはまた今夜にでも、我々が自分で彼のところへ出向いて、彼に念を押してくる」(1447年11月25日付)[45]。

その翌日、セル・ピエロ・チェッキはバルトロンメオに書簡を送り、自分達の説得工作によって、ブエ区の減税官のうち3人が、ほぼバルトロンメオの味方についたことを報告した[46]。曰く、ニッコロ・マガルディとジュリアーノ・チェッフィーニ（マウロ・チェッフィーニの兄弟である。説得にはマウロの貢献する所が大きかったと思われる）には直接交渉して、同意を得た。ヤコポ・ベルリンギエリについては、ネリ・セーニとジョヴァンニ・ダンブロジォ・デ

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

ル・ヴェルツィーノに仲介を頼んだ。この2人が「彼［ベルリンギエリ］を望むように動かせるのを、私は知っている」のである。但し、ジョヴァンニ・デル・ザケリアの態度ははっきりしないので、これへの工作は続けている、と。減税官に対するこうした一連の工作は、フィレンツェの都市行政に、親族や隣人・友人を介した人間関係が、直接に影響し得たことを如実に物語っている。

最終的に工作は功を奏し、バルトロンメオの減税措置が行われた。その額は僅か16ソルディ4デナリであったが、多くの人間がバルトロンメオの為に動いた結果であった(47)。ここに友人関係の本質が現れている。バルトロンメオと直接に関係を持っている友人達は、必ずしも大きな社会的影響力を持たず、その数も多くはない。だが彼らのそれぞれが、能力の及ぶ限りで尽力すると同時に、自己の人脈を利用しながら、人間関係の網の目を広げていく。「友人の友人（amici degli amici）」(48)に依存することで、人間関係は地縁・血縁を越えて、際限なく広がり得るのである。「友人関係」の名称の陰には、各成員が共通に、或いは独自に持つ親族関係、隣人関係、友人関係、パトロン・クライアント関係が混在している。役職への選出、強制公債の割当における優遇などの利権を得る為に、友人の支援が期待される中で、友人関係を構成しているそれぞれの成員は、そうした異なる人脈を結び付ける媒介、ネットワークの結節点となった。特に、地縁や職業、姻戚などの人間関係によっては結び付くことが困難な階層間にも、友人関係は柔軟に絆を作り上げる。こうして友人関係は、水平方向に広がると同時に、垂直方向に階層間を結んで伸びていく。そして多くの場合、利権の獲得の為に必要となるのは、当然ながら有力者との人脈であったので、友人関係は、それらの有力者をパトロンとするパトロネィジの連鎖を形成していくのである。

パトロネィジの連鎖は、彼より下の階層へも向かった。彼自身もその何人かのパトロンであった。バルトロンメオの農村の所有地の管理を任されていた、モンテスペルトリ（フィレンツェ南西の農村コムーネ）の金細工師アンドレア・ダントニオ、フィレンツェで彼の為に雑用を引き受けていた、胴着職人のベルト・ディ・ミニアートなどが、彼のクライアントであった(49)。バルトロンメ

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

オは、パンドルフィーニ家が彼に対してそうであったように、こうしたクライアントに恩恵を施し、その代わりに自身に奉仕させていた。バルトロンメオを介した上下のパトロネィジの結合は、アンドレア・ダントニオの書簡に窺える。彼はモンテスペルトリで塩を販売する許可を得る為に、ボーノ・ボーニ（当時、塩のガベッラ担当官の一人であった）への紹介をバルトロンメオに依頼している(50)。

この利権の連鎖の中では、「友人」相互が、必ずしも知り合いとは限らない。上述のモンテスペルトリのアンドレア・ダントニオは、ボーノ・ボーニへの紹介を頼んでおきながら、「彼はあなたの偉大な友人で、だから私の友人でもある（è grande tuo amicho e anche è mio)」と断言している(51)。またケントは、バルトロンメオの友人ステファノ・メッティが、或る人物を「我々の友人の一人で君の友人でもある（uno nostro amicho e anche tuo)」と紹介したにも拘わらず、その素性や住所を説明している事例を挙げている(52)。即ち、ここでは「友人」の語が、実際の親しさとは関係なく、人的ネットワークに加わり、その恩恵を受けることを無条件に容認される為の、一種のパスワードになっている。「友人」と紹介してもらえば、他の成員から便宜を図ってもらう資格を持つのである(53)。

この背景には、「友人関係」という概念の持っていた献身性が窺える。友人関係の中では、友人の為に尽力することが期待され、強要されたのである。ドメニコ・シモーニは1454年6月23日付の書簡で、モンテ・デッレ・ドーティの不正運用の嫌疑で、ピエロ・ジャンニが公正監視委員（コンセルヴァトーリ・ディ・レッジェ［公職就任者の監視機関］）から告発されている問題について、サルヴェストロ・デル・チーカが委員の一人なのに、友人であるジャンニを無罪にする努力をしていないと非難している(54)。一方、当のデル・チーカは8月3日付の書簡で、ジャンニの無罪の決定を知らせながら、「ピエロ・ジャンニの件は、私が彼と良い友人関係を結んでいて、しかも我々が兄弟のようなものであることを考えると、ずっと私の肩に負わされていた」と書いている(55)。デル・チーカは、友人関係の圧力を感じていたのであろう。

これらの友人関係の核に、親しい知人・友人同士の緊密な結合が存在したの

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

は確かであろう。ケントはバルトロンメオとデル・チーカ、カッチーニ、シモーニ、チェッフィーニとがほぼ同年代である点に着目し、子供期から生活空間を共にしてきた連帯感が、彼らの絆となっていると考えている(56)。「兄弟のように親愛な（Come fratello carissimo／Karo quanto fratello)」といった書簡の文言に見られる家族のメタファーにも、彼らの間の親近感を見ることが可能である(57)。しかし、友人関係がその成員に強要する献身性、その裏にある支援への期待と打算、また「友人」という語の陰にあるパトロネィジの存在は、無私の友情と信頼で結ばれた友人の間の平等性がフィクションであることを、露呈させる危険を孕んでいる。家族のメタファーは、友人関係のこの脆弱さを補強するものとして、用いられてもいるのではなかろうか。それ故に、モンテスペルトリのアンドレア・ダントニオさえも、「兄弟のように親愛なる友よ（Amicho charissimo quanto fratello)」とバルトロンメオに呼びかける。友人関係に疑似的な親族関係を持ち込むことによって、相互の平等と連帯は強調されるのである(58)。

3. メディチ体制とネットワーク

バルトロンメオの友人関係を特徴づけるものは、友人同士の個人的な繋がりである。親族の基盤も地縁的な基盤も弱い、彼のような人間にとっては、友人関係が重要な社会的紐帯となった。都市内部の様々な共同体との関係が希薄で、「個人」たらざるを得ない者を吸収する柔軟さが、友人関係にはあった。

この柔軟さによってバルトロンメオの人間関係は、地縁の域の外へと広がっていた。確かに彼のネットワークは、サンタ・クローチェ街区のブエ区及び隣接の行政区、これらに近接し、パンドルフィーニとボーニの地盤であるサン・ジョヴァンニ街区の行政区、そしてボーニの銀行のあったメルカート・ヌォーヴォの周辺にほぼ集中している(59)。しかしこれは、地縁的結合の結果ではなく、友人関係（その中には地縁的な紐帯も含まれてはいるが）を通じた結合の結果である。本来ならば、隣人関係を充実させ、最も強固な社会的基盤を築い

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

ておくべきブエ区において、バルトロンメオはベルリンギエリ、コッキ＝ドナーティ、サッケッティ等の有力者との間に、何らの特別な繋がりをも作らなかった。ブエ区での減税工作で減税官への働きかけが、専ら友人のネットワークを通じて、主にブエ区の外側から行われたことは、既に見た通りである。彼はブエ区での自分の社会的立場の弱さを強化する代わりに、寧ろ地縁に制約されない友人関係に依存して、自らの立場を補強したのであった(60)。

友人関係には、しばしば新たな「友人」の紹介と共に新しい人脈が加わり、ネットワークが拡大された。ボーニやパンドルフィーニ、ソデリーニのような上層市民は、友人関係を都市支配層の上部へとリンクさせ、様々な利権に与かる上で、必須の存在であった。一方、バルトロンメオのように、中層市民でありながら有力家門との強固な絆を有する人間は、パトロネィジの仲介役として頼られた。1447年にセル・ピエロ・チェッキは、彼自身の減税の為に、彼の行政区（ルオテ）の減税官に働きかけてくれるように頼んでおり、1448年にはサルヴェストロ・デル・チーカ（モンテルポにポデスタとして赴任中）が、公職抽選で選出されるように支援を受ける為、バルトロンメオに有力者への仲介を依頼している(61)。

バルトロンメオ自身、パンドルフィーニやボーニとの繋がりを通じて、彼の人脈を上方へと拡大した。例えば、彼の友人関係の中に、当時のフィレンツェの中心的な文化人の一人で、メディチ家をはじめ都市の有力市民と親交のあった書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチがいる。バルトロンメオは、パンドルフィーニ家を通じて彼と知り合い、親しくなったのである(62)。またメルカート・ヌォーヴォにあるボーニの銀行は、情報交換の場であると共に、こうした人脈を広げるセンターでもあった。バルトロンメオへの書簡の差出人には、銀行の顧客・関係者が多く含まれており、ニッコロ・バルトリーニのように、公職選挙でバルトロンメオが優遇されるように取り計らってくれた人物もいる(63)。そして、彼が1473年にプリオーレに、1478年にボニ・ホミネスの一人に選ばれたのは、ロレンツォ・デ・メディチと結び付いた、ピエルフィリッポ・パンドルフィーニの後援があってのことであろう(64)。

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

では、パンドルフィーニ家やボーニ家にとって、こうした友人関係はどのような意味を持っていたのか。パンドルフィーニもボーニも、世帯数が少なく血縁・地縁の基盤の弱いジェンテ・ヌォーヴァであったことに、注意しなければならない(65)。確かに両家とも都市最上層に属していた。しかし、パンドルフィーニ家は、1434年以後、メディチ家と結び付いて急速に抬頭した家門であり、その勢力基盤は長期にわたって築かれてきたものではない。バルトロンメオのように広い人脈を持つクライアントと結び付くことは、一族の社会的基盤を安定させるのに有益であった。ましてメディチ派ではなく、メディチ派との特別な繋がりも持たないボーニ家には、ボーニ家を支え、同階層にも異なる階層間にも——必要であれば、メディチ家に迄——広がる可能性を持った友人関係は、貴重な支持基盤である。特にバルトロンメオが、パンドルフィーニ家と強い結び付きを持っていたことは、ボーニ家にとって重要であった(66)。

但し、こうした友人関係の絆は、総てが太く丈夫な訳ではない。例えば、ヴェスパシアーノはボーニとそれ程親しくなかったらしい。バルトロンメオに対して、50リラの負債の抵当として、家と農園をロドヴィコ・ボーニに取られかけているアントニオ・カランドリなる人物の為に、ロドヴィコへの執成を頼んでいる(67)。逆に、ボーニはパンドルフィーニとの紐帯を強化することには成功しなかった。1474年にボーニの銀行は倒産したが、支援は無く、彼の息子達は罪に問われて公職追放となったのである(68)。

メディチ家が権力を確立するにつれて、フィレンツェ社会のパトロネィジは、メディチ家と、これを支えるメディチ派の有力者とに集中していった。公職選出や公債割当の減免などの利権をめぐる結束と、政治党派とが一体化した1434年までの体制を、メディチ家は基本的に継承していた(69)。メディチ家は反対派を潰す一方で、支持者を優遇することにより、勢力基盤を安定させようと努めたのである。先に触れたように、上級行政職とは無縁であったバルトロンメオが、1470年代（もはや50歳代後半である）になってプリオーレやボニ・ホミネスに選ばれているのは、ピエルフィリッポ・パンドルフィーニの画策と、更にその背後のロレンツォ・デ・メディチ（彼がフィレンツェの政治を牛耳るよ

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

うになるのが、正しく1470年代である）の政治力によるところが大きい。1480年には、ピエルフィリッポは、新しく設けられるバリーアにバルトロンメオを入れる為に、ロレンツォに働きかけて（失敗したが）いるのである。「ロレンツォとアントニオ・プッチに貴方のことを任せましたよ。間に合うかどうか判らないけれど」（1480年4月15日付）、というピエルフィリッポの言葉は、バリーアを組織する際のロレンツォ個人の発言力（絶対的ではないが）を物語る[70]。バルトロンメオのような、親族や地縁による社会的基盤を持たない人間は、メディチ派との繋がりを持つことで、上級行政職にも就けた。そして、これを可能にしたのが友人関係であった。直接には接触の困難な人物にも、パトロネィジの連鎖を経て、結び付くことができたのである[71]。こうして、メディチ体制が確立していくに従い、多くの利権がメディチ派に集中するようになった。友人関係のパトロネィジの連鎖も、ここに集中することになる。

この動向は、15世紀に進行していったフィレンツェの支配層の「都市貴族化（aristocratization）」に、並行している[72]。これによって都市政治は、次第にメディチ家とその周囲の限られたエリートの手に握られるようになり、従来の支配層の中でも、最上層以外の諸階層は疎外されることになった。モルホによれば、メディチ体制が一段と強化された1480年以後のフィレンツェでは、それ以前と比較して、支配層と非支配層との通婚率が低下（62.7%→56%）した。更に支配層をHS（High Status）、S（Status）、LS（Low Status）の3ランクに分けて通婚パターンを見ると、支配層内部のHSとS・LSとの通婚が減り、HSと非支配層との縁組が僅かに増加している。つまり支配層（HS・S・LS）と非支配層という区別であったものが、支配層（HS）と非支配層とに大別できるようになったのである[73]。更に、地区共同体の隣人関係にも、都市政府の管理が及び、各地域の家門の勢力基盤を崩そうとしていた[74]。メディチ権力に連なることが、社会的成功の鍵となりつつあった。柔軟にどこにでも伸び広がる友人関係は、それを実現させる人脈となる。その結果、友人関係は、いよいよパトロネィジの性格を強め、その連鎖が、メディチ家を支えるメディチ派のピラミッドを形成していくことになるのである。

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

おわりに

15世紀の都市社会を支える人間関係は、中世に支配的であった家や地域の結合から、友人関係に見られるような、個と個を結び付ける、より柔軟で自覚的な人的結合関係へと変わりつつあった。家の論理が払拭された訳ではなく、貴族化していく上層市民の間では、家の由緒というものは重視される。しかし限られた最上層を除けば、独自の勢力基盤を築くことには重きが置かれなくなっていた。寧ろメディチ派の有力者と結ぶことが重要だったのである。クラピッシュ＝ジュベルは、15世紀後半になると、上層市民が中・下層民を洗礼立会人に指名する代わりに、自分よりも上の有力者にこれを依頼する傾向が見られることを指摘している(75)。

一方、職人や労働者など下層住民の世界は、従来とそれ程変わらなかったであろう。仕事場、地縁、そして酒場での付き合いが、相変わらず人間関係を作っていたであろう(76)。しかし、彼らと中層以上の市民との関わり方は、変わったはずである。しかし、現時点で筆者の力量では、これ以上の考察は出来ない。下層住民の社会もまた変化した可能性を指摘するに留めておく。

註（紙数の都合上、引用部分の原文は提示しない）

（1） F. W. Kent and G. Corti, *Bartolommeo Cederni and His Friends. Letters to an Obscure Florentine*, Firenze, 1991.

（2） 斉藤寛海「一五世紀のフィレンツェにおける権力構造—研究視点についての予備的考察—」、佐藤伊久男編著『ヨーロッパにおける統合的諸権力の構造と展開』（創文社、1994）、446–61 頁。

（3） J. M. Najemy, *Guild Republicanism in Trecento Florence: the Successes and Ultimate Failure of Corporate Politics*, in《American Historical Review》84 (1979). id., *Corporatism and Consensus in Florentine Electoral Politics 1280–1400*, Chapel Hill, 1982.

（4） 清水廣一郎「『チォンピ一揆』に関する二つの記述史料」、同『イタリア中世都市国家』、岩波書店、1975。高橋友子「一三七八年フィレンツェ都市動乱—「チォンピの反乱」をめぐって—」『立命館文学』（1985）。

（5） 斉藤前掲論文、456–61 頁。Najemy, *op. cit*, 263–317.

（6） D. V. Kent, *The Rise of the Medici. Faction in Florence 1426–1434*, Oxford, 1978.

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

(7) C. Klapisch-Zuber, 《*Parenti, amici e vicini*》: *Il territorio urbano d'una famiglia mercantile nel XV secolo*, in 《Quaderni storici》 33 (1976).

(8) idem., *Ruptures de parenté et changements d'identité chez les magnats florentins du XIVe siècle*, in 《Annales ESC》 43(1988). *L'invention du passé familial*, in id., *La maison et le nom*, Paris, 1990.

(9) Giovanni di Pagolo Morelli, *Ricordi*, in *Mercanti scrittori. Ricordi nella Firenze tra Medioevo e Rinascimento*, a cura di V. Branca, Milano, 1986, p. 168.

(10) A. Molho, *Marriage Alliance in Late Medieval Florence*, Cambridge, Mass., 1994, pp. 238-50, 285-97.

(11) F. Franceschi, *Oltre il* 《*Tumulto*》. *I lavoratori fiorentini dell'Arte della Lana fra Tre e Quattrocento*, Firenze, 1993, pp. 313-14.

(12) 拙稿「中世イタリア都市の隣人関係—フィレンツェの場合—」『人民の歴史学』110 (1991)。

(13) D. V. Kent and F. W. Kent, *Neighbours and Neighbourhood in Renaissance Florence. The District of the Red Lion in the Fifteenth Century*, New York, 1982. 尚、本稿ではゴンファローネを「行政区」と訳したが、クワルティエーレや小教区もまた行政機能を有する「行政区」である。この点を考慮して、斉藤寛海氏は、前掲論文ではゴンファローネを「旗区」と訳しておられる。

(14) Morelli, *op. cit.*, p. 190.

(15) F. Klein, *Ceti dirigenti e controllo dello spazio urbano a Firenze: I legami di vicinato*, in *I ceti dirigenti nella Toscana tardo comunale*, Firenze, 1983, p. 219. 徳橋前掲論文、13-16 頁。cf. C. Klapisch-Zuber, *Parrains et filleuls. Étude comparative*, in id., *op. cit.*, pp. 116-22. id., *Compérage et clientélisme à Florence (1360-1520)*, in 《Ricerche storiche》 15 (1985).

(16) R. F. E. Weissman, *Ritual Brotherhood in Renaissance Florence*, New York, 1982, pp. 79-80. cf. 根占献一「コンパニーア考—プラトン・アカデミーの中世的・社会的背景—」『ルネサンス研究』1 (1994)。

(17) N. Rubinstein, *The Government of Florence under the Medici 1434 to 1494*, Oxford, 1966, pp. 68-135.

(18) *Bartolommeo. cit.*, p. 4.

(19) *ibid.*, pp. 4-5. Molho, *op. cit.*, pp. 368, 384.

(20) *ibid.*, pp. 16-17.

(21) *ibid.*, p. 5. Morelli, *op. cit.*, p. 168.

(22) *ibid.*, pp. 19-20. ドメニコは結婚に際して、妻の嫁資としてブエ区に家を得たのである。モルホによると、1457/8年のカタストでベルトの子アーニョロ・チェッキとミケーレの子ロモロ（とピエロ）・チェッキという人物とが、ブエ区で申告をしているが、当該のセル・ピエロ・チェッキについては明らかではない。Molho, *op. cit.*, p. 384.

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

(23) *Bartolommeo. cit.*, Letter 38, pp. 103–04.

(24) 妻（母親）は他家から入り込んだ異分子であるばかりか、若くして夫と死別した場合、実家の要請に従って婚家を去り、再婚する可能性も考えられる存在であった。嫁資 dote を取り返し、子供を置いて出ていってしまう「残酷な母」について、当時の文献はしばしば触れている。C. Klapisch-Zuber, *La 'mère cruelle'. Maternité, veuvage et dot dans la Florence des XIVe–XVe siècle*, in《Annales ESC》38 (1983). 大黒俊二「ヨーロッパ家族史へのふたつのアプローチ—イタリアからの視点—」前川和也編著『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から—』、ミネルヴァ書房、1993。清水廣一郎「家と家とを結ぶもの」『社会史研究』6 (1985)。

(25) *Bartolommeo. cit.*, pp. 13–24.

(26) Molho, *op. cit.*, pp. 367–68. 彼の分類では、チェッフィーニとチャッキは "Status"、カッチーニは "Low Status" とされ、"ruling class" のうちに数えられている。

(27) *Bartolommeo. cit.*, pp. 21–22, Rubinstein, *op. cit.*, pp. 264–301.

(28) *Bartolommeo. cit.*, pp. 36–37. Rubinstein, *op. cit.*, p. 154. 屋敷の記事は1469年の Catasto del Monte の申告による。F. W. Kent, *Bartolommeo. cit.*, p. 36. L. Ginori Lisci, *I palazzi di Firenze nella storia e nell'arte*, Firenze, 1985, pp. 241–42. 申告はジョヴァンニではなく、ボーノによって行われている。ケントは、この建物がドラゴ区にあると述べているが、従来利用されてきた街区の区分に従えば、ここはサンタ・マリア・ノヴェッラ街区に属する。S. コーン Jr. によると、S. Michele Berterdi 教区はドラゴ区とリオン・ビアンコ（白獅子）区に二分されていたという。S. K. Cohn Jr., *The Laboring Classes in Renaissance Florence*, New York, 1982, table 3–3.

(29) *Bartolommeo. cit.*, pp. 33–34.

(30) *ibid.*, pp. 30, 32. Lorenzo de' Medici, *Lettere*, VI, a cura di M. Mallett. cf. Ginori Lisci, *op. cit.*, pp. 507–12. ピエルフィリッポの父ジャンノッツォも、コジモ・デ・メディチと交友関係を持っていた。

(31) *Bartolommeo. cit.*, p. 24.

(32) *ibid.*, pp. 26–27.

(33) *ibid.*, pp. 8, 24–28.

(34) 『リコルディ』の別の箇所では、自分を助けてくれるような人物と姻戚関係になることを、モレッリは勧めている。その際にも、まず行政区の中でかかる人物を探し、見つからなければ街区に範囲を広げて探すようにと言う。Morelli, *op. cit.*, p. 195. L. Fabbri, *Alleanza matrimoniale e patriziato nella Firenze del '400. Studio sulla Famiglia Strozzi*, Firenze, 1991.

(35) Kent and Kent, *op. cit.*, pp. 48–53.

(36) *Bartolommeo. cit.*, pp. 13–17.

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

(37) Kent and Kent, *op. cit.*, pp. 49–50.

(38) *ibid.*, Letter 11, p. 70.

(39) P. C. Clarke, *The Soderini and the Medici. Power and Patronage in Fifteenth-century Florence*, Oxford, 1991.

(40) *Bartolommeo. cit.*, p. 14, n. 47.

(41) *ibid.*, Letter 13, p. 72. ケントは、シモーニが仲介して、トンマーソ・ソデリーニとバルトロンメオとを結び付けた可能性を指摘している。*ibid.*, p. 20. しかし、マウロ・チェッフィーニもソデリーニのクライアントなので、彼が紹介した可能性もある。Clarke, *op. cit.*, p. 148.

(42) *Bartolommeo. cit.*, Letter 12, pp. 71–72.

(43) *ibid.*, Letter 13, p. 72.

(44) *ibid.*, pp. 13–14. ケントによれば、先に触れたソデリーニも、自分の所属するサント・スピリト街区のドラゴ区（2つの街区に同名の行政区が存在した）で減税の役目を負っていた。彼もバルトロンメオの為に、減税官同士の繋がりを利用し得る立場であった。

(45) *ibid.*, Letter 15, p. 75.

(46) *ibid.*, Letter 16, pp. 76–77.

(47) *ibid.*, p. 8.

(48) *ibid.*, pp. 14–15.

(49) *ibid.*, p. 40. ケントはこれ以外に、Lioncino di Papino da Urbana, Stefano di Checho di Gino, Piero di Dato, Giero di Choccho, Caterina di Piero da Slavonia の名を挙げている。

(50) *ibid.*, Letter 35, p. 102.

(51) *ibid.*

(52) *ibid.*, p. 44.

(53) 対照的に、モレッリは「友人とする相手は百回試せ」と慎重である。Morelli, *op. cit.*, pp. 177–78.

(54) *Bartolommeo. cit.*, Letter 31, pp. 96–97.

(55) *ibid.*, Letter 33, p. 100.

(56) *ibid.*, pp. 17–20.

(57) *ibid.*, pp. 35–36, 44.

(58) パンドルフォ・パンドルフィーニは、バルトロンメオを息子の洗礼立会人に指名している。これもまた、疑似親族関係による絆の強化である。*ibid.*, Letter 37, p. 103. cf. Klapisch-Zuber, *Compérage. cit.*, pp. 129–32.

(59) *Bartolommeo. cit.*, p. 42.

(60) *ibid.*, pp. 14–17. cf. Kent and Kent, *op. cit.*, p. 50.

(61) *ibid.*, Letter 16, pp. 76–77, Letter 20, pp. 80–81.

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

(62) *ibid.*, p. 28.

(63) *ibid.*, pp. 33–35.

(64) *ibid.*, p. 30.

(65) *ibid.*, pp. 32–36.

(66) Klein, *op. cit.*, pp. 218–19.

(67) *Bartolommeo. cit.*, Letter 39, pp. 104–105.

(68) *ibid.*, p. 36.

(69) A. Brown, *The Medici in Florence. The Exercise and Language of Power*, Firenze, 1992, pp. 309–14. cf. D. V. Kent, *op. cit.*

(70) *Bartolommeo. cit.*, 30, Letter 44 and 45, pp. 109–111. 引用は Letter 45 より。メディチ家の発言力は、他の有力市民を完全に圧した訳ではない。それ故にこそ、利権の恩恵を以てメディチ家への支持を強化し、メディチ体制を支える必要があったのである。cf. 根占献一「ルネサンス・フィレンツェ社会におけるパトロネージの諸相——政治と文化の間の個人」『日伊文化研究』32 (1994)。

(71) ロレンツォ自身が、バルトロンメオのことに言及した書簡が、残っている。Lorenzo de' Medici, *op. cit.*, Lettere 574 (5/aprile/1482), pp. 330–331.

(72) A. Brown, *op. cit.*, pp. 321–326.

(73) Molho, *op. cit.*, pp. 324–338.

(74) Kent and Kent, *op. cit.*, pp. 13–74.

(75) Klapisch-Zuber, *Compérage. cit.*, pp. 132–133. しかしながら、メディチ家が市政を掌握しきれなかったことは、1494年以降、反メディチ派の巻き返しがあったことからも、明らかである。

(76) Franceschi, *op. cit.*, pp. 305–334.

NII-Electronic Library Service

Associazione di Studi Italiani in Giappone

L'"amicizia" nella società fiorentina nel XV secolo

Yo Tokuhashi

I fiorentini del XIV e XV secolo attribuivano importanza alle relazioni fra parenti, vicini e amici. Nei rapporti politici o in quelli quotidiani contavano spesso sul *network* fra loro, facendo attenzione a mantenerlo e a svilupparlo, secondo il consiglio di Giovanni Morelli.

In questo ambiente, un oscuro fiorentino di estrazione comune, Bartolommeo di Cederno Cederni (1416–1482), visse senza alcun potere politico o influenza sociale derivanti dalla sua parentela, ma contando sui suoi amici, potenti e non : i Pandolfini, che erano una delle famiglie medicee più potenti, il ricco banchiere Bono Boni ed altri amici e vicini del suo ceto, come Piero Gianni, Salvestro del Cica, Domenico Simoni ecc. Ognuno dei suoi amici trasse beneficio dal clientelismo compreso nell'amicizia, presentando ad altri membri i suoi amici o protettori, e spesso raccomandandoli. In particolare Bartolommeo, che non aveva nessun legame utile con i potenti del proprio gonfalone, contò sugli amici per ottenere uno sgravio delle sue imposte all'interno del proprio gonfalone, o per ottenere un posto negli uffici comunali. La sua rete di amici si estese oltre gli ambienti vicini, giungendo fino a Lorenzo de' Medici.

Non sempre gli "amici" si conobbero bene, tuttavia dovettero aiutarsi. La dedizione reciproca caratterizza il termine "amicizia" che comprendeva veri amici, protettori e clienti : un amico faceva sforzi per altri amici o amici degli amici. Insomma, questi legami di amicizia erano utili per stabilire relazioni con i cittadini più potenti. Così l'amicizia era una catena di protettori. Cittadini del ceto medio come Cederni erano sensali o mediatori di protezioni, raccomandando l'uno all'altro. Mano a mano che la famiglia dei Medici governava la Repubblica, i fiorentini tendevano a raccomandarsi ai Medici o ai potenti medicei più che agli altri potenti anti-medicei. Nella seconda metà del XV secolo varie amicizie si concentrarono in una grande clientela attorno ai Medici.

NII-Electronic Library Service